

Title	刑事コロンの謎
Author(s)	氏家, 理恵
Citation	聖学院大学論叢, 15(1): 27-35
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=193
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

刑事コロンボの謎

氏 家 理 恵

The Mystery of *Columbo*

Rie UJIE

Columbo appears to be of the typical mystery genre. In the *Columbo* series, murders occur, a detective investigates the cases, and the perpetrators are finally arrested. One twist, however, is that the criminals, the motives for their crimes, and their techniques of deception are actually quite clear from the beginning of the stories. On this point, *Columbo* may be categorized as an unusual type of mystery.

The charm of *Columbo* is in the process of how Lieutenant Columbo, the son of Italian immigrants, corners the criminals, who are usually upper class authority figures in American society. The actual mystery of the *Columbo* series is how he corners the criminals and solves the murder cases in the process. When everything is finally settled, the audience finds that it has gone through a cathartic experience.

I. はじめに

『刑事コロンボ』 (*Columbo*) は、アメリカのテレビドラマとして1968年に放映が始まり、長期シリーズ化している作品である。もともとはリチャード・レビンソンとウィリアム・リンク (Richard Levison & William Link) が共同で書いた『殺人処方箋』 (*Prescription: Murder*) という戯曲が書き直され、テレビドラマ化されたのがきっかけであった。このあと1978年までの10年間に渡ってテレビムービー 2本と7シーズン43話との計45作品が作られ、1988年からは新シリーズ『新・刑事コロンボ』として、断続的に22作品が作られて現在に至っている。コロンボの生みの親であるレビンソンとウィリアムが実際に脚本を書いたのは2作品、原案を提供したのは5作品のみであるが、戯曲『殺人処方箋』の段階でその構成要素のほとんどができあがっていたというコロンボの物語は、^{*1} 彼らの作風を踏襲する形で作り続けられている。

*1 ダウッドジアク, 9 ページ。

Key words: *Columbo*, Mystery, Detective Story, Ethnicity

刑事コロomboの謎

コロomboを始めとする登場人物の性格付けは固定化し、彼らを取り巻く人間関係や物語の展開はパターン化されている。それは作品が風化する一要因となる危険性も孕むことになるが、にもかかわらずコロombo物語の人気の持続しているのは、それだけ視聴者の興味・関心を惹きつける要素が作品にあることの証でもある。本稿の目的は、1968～78年の最初のシリーズを中心にコロombo物語の構図をあらためて概観し、この物語がミステリとしては特異な位置を占める要因が、アメリカ的な文化・社会構造と深く関わっていることを論じることにある。

Ⅱ. 探偵としての刑事コロombo

現在、「ミステリ」の定義は非常に幅広いものとなっており、探偵役が出てこない作品や推理さえ行われない作品もある。そもそもミステリというジャンルにおける基本形、つまり推理小説・探偵小説が確立したのは19世紀初頭と言われている。^{*2}この時代は警察制度の発達のなかでも、犯罪捜査をする部署がパリやローマなどの大都市を中心に成長してきた時期であった。現在のロンドン警視庁（スコットランドヤード）の原型ができたのもこの頃である。つまり、警察機構のなかで犯罪捜査を専門にする刑事が誕生したということになる。これにより少数の刑事が個々の犯罪捜査をするという捜査方法が生まれ、犯罪捜査技術も進んだ。この社会構造の変化と職業の誕生がなければ、それを下敷きにした物語も誕生し得ない。もちろん、後から考えれば、ミステリ的な要素のある作品は18世紀以前にも存在していると言えるが、ジャンルとしての「ミステリ」が誕生したのはこの時期ということになる。

名探偵が登場して困難な謎を解き明かすという、いわゆる本格ミステリと呼ばれるミステリの原型を作ったのは、19世紀半ばのアメリカの作家エドガー・アラン・ポー（Edgar Allan Poe）である。彼は「モルグ街の殺人」（“The Murders in th Rue Morgue,” 1841）によって、オーギュスト・デュパン（C. Auguste Dupin）という探偵を生み出し、その物語パターンと名探偵像は、19世紀末イギリスのコナン・ドイル（Sir Arthur Conan Doyle）、20世紀になつてはアガサ・クリスティー（Agatha Christie）に代表されるミステリの下地となった。ドイルが生み出したシャーロック・ホームズ、クリスティーが生み出したエルキュール・ポアロなどのいわゆる名探偵は、頭脳明晰で推理能力にすぐれ、証拠や証言をもとに論理を働かせ、警察も匙を投げるような難事件をいとも簡単に解き明かす。物語の典型的なパターンとしては、まず犯罪が起こり、その捜査の途中で主に警察による間違った捜査がなされたあげく、最後に名探偵が種明かしをするというものであった。その後イギリスでは1920～30年代にかけて、本格派ミステリの黄金期と呼ばれる時代を迎え、クリスティー以外にもエラリー・クイーン（Ellery Queen）やディクソン・カー（John Dickson Carr）な

*2 Schwartz, pp. 1-2, ヘイクラフト『娯楽としての殺人』, 22-25ページなど。

どが次々と「名探偵」を生み出していく。

その後、探偵役の人物設定にはさまざまなものが現れるようになったが、コロomboは捜査方法において、名探偵の伝統を現在でも受け継いでいると言える。彼は、ロサンゼルス市警察の警部補であるが、彼の捜査の背後に組織捜査を伺わせるものはほとんどなきに等しい。組織としての警察、あるいは複数の刑事による合同捜査という要素が薄い点で、1950年代にアメリカで出てきた、警察の集団的な捜査活動を扱い、その人間関係や心理的駆け引きを描く「警察小説」とは一線を画している。コロomboの物語において、事件解決へ向かって推理し行動するのは、コロomboただ一人であり、彼の独特な推理と捜査方法によって、犯人が暴かれ事件が解決されるのである。

Ⅲ. ミステリとしての『刑事コロombo』

現在に至るミステリの変容のなかで最も顕著なのが「謎」の多様化である。初期のミステリにあっては、犯罪を犯した犯人が最大の謎で、その犯人捜査が探偵役の仕事であった。かつての推理小説が「フーダニット (whodunit=Who have done it?)」と呼ばれたのはそのためである。しかし、ミステリの歴史が進むにつれて、その「謎」は、犯罪方法（たとえば、殺人ならどのように殺害したのか、盗みならどうやって盗んだのか）になったり、容疑者のアリバイになったりと多様化していった。その後、「なぜその犯罪を犯したのか」という動機、つまり犯罪に至る人間の内面的な感情が探るべき「謎」として提示されるようになり、現在では、例えばアメリカの作家パット・マガー (Pat MaGerr) の作品のように、「被害者」や「探偵」そのものが探すべき「謎」であるというものも出てきた。^{*3} なかには犯罪が起こったのかどうかさえ不確定な作品もある。以上のように、現在我々は「ミステリ」と一口に言っても、さまざまなパターンの作品を目にする状況にあり、その結果、物語に何らかの「謎」があり、その「謎」を調べて解き明かす探偵役（それは刑事や職業探偵とは限らない）がいる、というのが「ミステリ」の最低限の要素となるに至った。

それでは、「謎」の存在がミステリの最小限の必須項目であり、そして、その「謎」を探求する物語が「ミステリ」であるなら、『刑事コロombo』作品における謎はいったい何なのであろうか。最初のシリーズばかりでなく新シリーズも含めて70話近くあるコロombo作品のほとんどが、冒頭において犯人が登場し、被害者を殺害するところから物語をスタートさせる。犯行の前段階として、犯行に至る動機が提示されることも多々ある。つまり、最初から犯人も、殺害方法も、犯行動機も、そして犯人のアリバイ・トリックさえ明らかであり、解決されるべき謎とはなっていない。そしてそれを知らないのは、我々ではなく探偵役のコロomboなのである。

そうすると『刑事コロombo』作品における謎は何になるのか。答えは、「どのようにしてコロombo

*3 パット・マガー『被害者を捜せ』(Pick Your Victim, 1946), 『探偵を捜せ』(Catch Me If You Can, 1948) など。

刑事コロomboの謎

ボが真犯人を突き止め、犯人のアリバイ工作を見破り、犯人を逮捕へと追い込むか」である。我々にとっては、犯人や犯行に関することはすべて謎ではなく、コロomboの行動こそが探求される「謎」となる。そしてこの「謎」は、多様化したミステリの「謎」の中でもあまり類を見ない、非常に特異なものなのである。殺人事件が起り、刑事が捜査に乗り出して事件を解決するという、一見して本格的なミステリと思われるコロomboシリーズは、実は、ミステリとしては非常に風変わりな位置にある。ややもするとミステリとしての正当性を損ねる危険を冒してまでも、コロomboと彼の行動を謎の中心点に置くこと、そのことにこそ、この物語の力点が置かれているのである。

IV. 刑事コロomboと犯人

コロomboがイタリア系アメリカ人であることは、その名前からも明らかである。祖父、両親ともイタリア人、ニューヨークのチャイナタウンのそばで大家族の中で育ち、高卒で警官になったという経歴を付与されたコロomboは、アメリカ社会におけるイタリア移民の人生の体現者でもある。「うちのかみさんがね」は、犯人から情報を得るための口実としてしばしば利用される彼の口癖の一つであるが、もう一つの口実である愛犬の話とともに、家族を大切にするというイタリア人のイメージを補強するものともなっている。

コロomboのロサンゼルス市警察での肩書きである「刑事」の原語は‘lieutenant’であるが、アメリカの警察機構におけるこの肩書きは、日本で言えば「警部補」に当たる、いわゆる中間管理職というような微妙な立場である。^{*4}コロomboはたたき上げの警察官であり、能力から「警部補」にはなっただけでも、「警部」にはなかなか届かない、もしかしたら定年間近まで届かないかもしれない、そのようなニュアンスがこの肩書きには内包される。彼はいわゆるノンキャリアの警官の代表であり、それを象徴しているのが彼の肩書きなのである。トレードマークのよれよれのレインコートと故障ばかりするフランス製小型車は彼の経済状況をほめかし、チリとブラック・コーヒーを好物としている彼の乏しい食生活は彼の嗜好を物語っているが、それはとりもおさず、彼の社会的地位が決して高くはないことを如実に示している。探偵役としてのコロomboは、しがないイタリア系警官なのである。

それに対し、主人公のコロomboを差し置いて物語冒頭から登場する犯人には、どのようなキャラクターが付与されているものなのだろうか。シリーズ45作品から犯人の職業・社会的立場をいくつか挙げてみると、精神分析医（『殺人処方箋』(Prescription: Murder)）、弁護士（『死者の身代金』(Ransom for a Dead Man)）、人気作家（『構想の死角』(Murder by the Book)）、退役将軍（『ホルスター将軍のコレクション』(Dead Weight)）、美術評論家（『二枚のドガの絵』(Suitable for

*4 日本語タイトルの『刑事コロombo』は、最初の訳をそのまま使って「刑事」になっているが、ドラマの中では「警部」と呼ばれている。

Framing)), 建築家 (『パイルD-3の壁』(*Blueprint for Murder*)), オーケストラ指揮者 (『黒のエチュード』(*Etude in Black*)), フットボールチームのオーナー (『アリのバイのダイヤル』(*The Most Crucial Game*)), 俳優 (『ロンドンの傘』(*Daggar of the Mind*)), 映画監督 (『狂ったシナリオ』(*Murder, Smoke and Shadows*)), 画家 (『殺意のキャンバス』(*Murder, A Self Portrait*)) などとなる。バラエティに富んだ犯人像に共通する点は、彼らが政治・経済・法律・軍事・学問・芸術など、社会のあらゆる分野においてトップクラスの人物たちであるということだ。さらに言えば、初期シリーズの犯人役のほとんどが男性であり、白人である。つまり、コロンボの物語において犯罪を犯すのは、アメリカ社会の上澄みとも言うべきハイクラスの人々なのである。

ここであらためて探偵役のコロンボの人物設定を思い起こせば、彼ら犯人役との社会的立場の違いが明らかになるであろう。犯人たちは、アメリカ社会の上位に位置し、社会に影響を与え、アメリカン・ドリームの体現者として人々の羨望を集める。それに対してコロンボは、よれよれのトレンチコートを身にまとい、買い替えることもないだろう故障だらけの車に乗って、警察組織の一員として与えられた事件を捜査する。犯人とコロンボが通常の生活において接点を持つ機会など、ほとんど考えられない。この社会的格差は、事件によって初めて彼らが接触する場面において明らかに描かれる。コロンボは、常に場違いな様子で犯人たちの邸宅や事務所を訪れ、低姿勢で彼らに話しかける。それに対して、犯人たちは尊大さを振りまき、一刑事に生活や仕事をかき乱される煩わしさを露骨に表明するのである。

V. アメリカ社会におけるイタリア移民

ここで確認しておきたい重要な点は、アメリカ社会におけるイタリア系移民の位置付けである。アメリカはさまざまな人種・民族そして言語・文化で構成された国であるが、しかし、その人種や民族の立場が必ずしも平等・公平というわけではなかったのは、アメリカの歴史が示している通りである。それは人種差別という形で吹き出すのが、その対象は、白人に対するネイティブ・アメリカンや黒人を始めとする人種的マイノリティにとどまらず、同様の構図が白色人種の内部でも存在し、微妙な力関係を生じさせた。アメリカにおけるマジョリティ、つまり権力を持っている＝社会の上部にいて社会を動かしている代表が、ワズプ(WASP)という短縮語で知られる白色人種アングロサクソン系プロテスタントであることは広く知られている。このワズプに対し、ラテン系カトリックであるイタリア系移民の社会的地位と社会的イメージを知ることが、実はコロンボの立場を理解するのに重要なポイントとなる。

ワズプではないことでイタリア人はすでにマジョリティから外れているが、そもそも民族的マイノリティとしてのイメージが付加されたのには、彼らがアメリカへ移住するに至った理由も関係している。もともと財産があってアメリカにやってきた人々と、飢えや貧困から逃れて新天地アメリカ

カで一旗揚げようと、ほとんど着のみ着のままやっていた人々とは、アメリカでの出発点が違って来る。そして、後者の典型が「新移民」と呼ばれたポーランドやオーストリア＝ハンガリー、イタリアなどの東欧・南欧からの移民たちであった。19世紀後半から20世紀初期にかけてのイタリア移民の多くが南イタリアの農村出身者で、大都市のスラム街に固まって住み、イタリアの生活様式を頑なに守ったこと、肉体労働以外の職に就くのが困難だったことが、彼らの社会的イメージを落とした。また、19世紀末に高まった反カトリック主義の矢面にたち、ポーランド移民やアイルランド移民とともに、イタリア移民に対する反感と偏見が増長されるに至ったのである。^{*5}もちろん、当時のイタリア移民すべてがそうではなかったのだが、経済的事情を抱える者が多いということが、往々にして彼らに対する固定したイメージを生み、それが差別意識や優越感・劣等感へと繋がっていった。

貧しさと飢えという理由から蓄えもほとんどなくアメリカに渡ってきた人々は、ハンデを与えられたアメリカ社会の中で、どのようにして生活し、仕事を得、アメリカン・ドリームを実現することができるのだろうか。対策の一つとしては、他の民族から差別を受けるのなら、同じ民族同士で団結し、助け合うことが有効であるし必要となる。華僑といわれる中国系移民の団結が強く、大都市にはたいていチャイナタウンがある事実は、彼らの団結力の強さを物語っている。同じように、リトルイタリアと呼ばれるイタリア人街もしばしば見受けられる。また、マフィアという組織が、その成り立ちは隣人同士、同じ民族同士の助け合いの互助組織であったことは有名である。マフィアの団結が固く、家族的な人間関係を持ち、裏切りが許されないのは当然のことなのだ。コロンの初期シリーズと同時期に制作された映画『ゴッドファーザー』(The Godfather, 1972)において、イタリアの中でもさらに貧しいシチリア島からやってきた移民がマフィアを結成し、アメリカ社会で権力を握ってのし上がっていくという典型的な構図が描かれているのは周知のことである。

そしてもう一つ、アメリカ社会に組み込まれるための方法は、民族格差を超えた社会的地位を認めさせ、社会的権力を得ることである。知的職業としては、弁護士・学者・医者などがあるが、教育が受けられなくとも、また経済的に貧しくとも入っていける分野、実力の世界の代表が、軍隊と警察であった。社会には裏表があるように、権力にも裏表がある。マフィアと警察は、権力志向の2極分化の結果なのだ。民主党と結びつきを深め、政党下部機関を通じて公共施設や交通機関・消防署・警察署などで仕事を得るといった戦略はアイルランド移民に先んじられたが、^{*6}イタリア移民も同時期に公共機関の下部に組み込まれていくようになった。

アメリカのフィクションに警官が登場する場合、そしてそれがさえない平の警官である場合、その警官がアイルランド系やイタリア系として描かれることが多いのは、このような社会背景を反映しているからである。コロンが最初に入ったニューヨーク市警察での上司がアイルランド人で

*5 ハイアム、35-42ページ、『世紀転換期のアメリカ』91-128ページ、『移民』258-9ページなど。

*6 タカキ、284ページ。

刑事コロンの謎

あったことは、だから当然とも言える設定である。また、子供時代に仲良くスラム街で育った者同士が、大人になってから犯罪者と警官という立場に別れて対決し苦悩するというテーマがよく扱われるのも、この皮肉な権力志向の2極分化が根底にある。大家族・ニューヨークのチャイナタウンのそばで育った環境・教育環境・職歴など、コロンの人生は、当時のイタリア系移民の子孫の人生でもある。コロンボは、その名前だけで社会的な立場、というより社会的なイメージを我々に感じさせ、それに、さえない性格と外見とでイメージの追い打ちをかけるのである。70作品近く制作されているが、コロンのファースト・ネームが未だ語られないことがないのは、彼がイタリア系アメリカ人、イタリア系警官の象徴であるからかもしれない。

VI. コロンボ物語の構図

以上のことを踏まえると、刑事であるコロンボに対して犯人たちが見せる侮蔑的な態度は、警察や警官そのものに対する嫌悪感に加え、イタリア系移民の末裔であることに対する差別意識が混じり合ったものであることは明らかである。彼が犯人にぞんざいな態度であしらわれ、何度も追い返され、ののしられ、背後で嘲弄されるといったシーンが繰り返されることによって、その構図は強調される。そして、アメリカ白人社会において、かつ社会構造的に上位者・強者であることをあからさまに態度で示す彼らを、コロンボは彼の唯一の、しかし最強の武器である推理力で追いつめていく。そこには、権力を使って逃げようとする相手に対して、その権威や圧力に屈服することなく立ち向かっていく勇氣、あるいはコロンボを自分より知的社会的に劣っていると見下している相手をやりこめる彼の機転や頭の良さがある。傲岸な差別意識と歪んだ優越感に対して、法の下での平等と正義、そして、差別意識を跳ね返す力が勝利を収めるのである。そこに視聴者は快感を得、権力者の不正や犯罪が見逃しにされない結末に対して拍手喝采するのであろう。社会的強者である者の犯罪を、イタリア移民の息子である、しがたない警部補が暴き、社会的立場の強さから超法規的な存在が許されると甘く考えていた者が、最後にその力関係を覆される。その社会転覆、地位逆転の爽快さがそこにはある。その面白さが、アメリカの人々を惹きつけてやまないのだろう。娯楽作品としての完成度以外に、コロンボという主人公とその物語がなぜアメリカで歓迎されたのかという理由が、ここには潜在的にある。^{*7}

コロンボの初期シリーズに、このような刑事像と犯人像が与えられ、その社会抗争・民族抗争としての構図が強調されたのには、1960年代のアメリカ社会の状況が深く関わっている。ターニは、

*7 日本で三谷幸喜脚本・田村正和主演のTVドラマ『古畑任三郎』が人気を呼び、「日本版コロンボ」と呼ばれたのは記憶に新しい。三谷幸喜がコロンボ物語を多分に意識して書いたものであることは明らかなのだが、『刑事コロンボ』シリーズと『古畑任三郎』シリーズには、探偵役としての刑事の人物設定において決定的な違いがある。古畑任三郎は、警視庁捜査一課のエリート警部であり、民族的な差別意識が介在することはない。

刑事コロンボの謎

第2時世界大戦後の「東西冷戦の緊張と赤狩りのヒステリーがあって探偵小説が大衆宣伝のいかげわしいプロパガンダ形式となった」*⁸ と言うが、1960年代のアメリカは、民族的アイデンティティを主張し、エスニシティを強く打ち出す社会意識と運動が盛んになった時期でもある。自分の本名や出自を明らかにする映画関係者や俳優が続出したのもこの時期に当たる。『刑事コロンボ』シリーズは、アメリカ1960年代の社会を背景に、価値観の変容するなかで、その構造を十分に踏まえたうえで誕生したものなのである。

コロンボの物語は、犯人の犯行とアリバイ作りから始まり、コロンボによる犯人の逮捕で終わる。視聴者は、コロンボがどのようにして犯人を追いつめるか、つまり、犯人が知能を駆使して練り上げたトリックとアリバイをどのように崩し、権力を行使して妨害するのをいかにして逮捕まで持っていくかを固唾を飲んで見守る。そして、その期待が成就したときに、ミステリとしてのコロンボ物語にカタルシスが訪れる。逮捕された後、犯人がその社会的権力と経済力、コネクションを利用して、裁判で無罪を勝ち取るかもしれないという危惧が問題にされることはない。ここではあくまでも、コロンボによるアメリカ上層社会への挑戦が主眼なのであるからだ。

VII. お わ り に

以上述べてきたように、『刑事コロンボ』シリーズは、イタリア系移民の警察官とWASPを中心としたアメリカ上層階級の人物との対決を軸にしたアメリカ的な物語の枠組みを持っている。『刑事コロンボ』はアメリカの社会背景をもとに生まれてきたものであり、そこにこのシリーズが長く続く人気の秘密が隠されていると言えるのである。

コロンボの誕生から30年以上たった今、時代が変わり、価値観が変わる中で、その犯人像も変化してきているが、彼の敵役がその時代その時代の権威者であることに変わりはない。時代によって生まれる新たな社会的権威や人気職業が、新たな犯人像を生み出す。コロンボの物語における犯人は、我々が社会的権威を感じる相手や価値観を映す鏡と言える。*⁹ 本稿では、初期シリーズとそれが生まれてきた社会背景との関連を考察してきたが、その後のシリーズによって社会構造の変化を見ることもまた有効と言えよう。次に制作されるコロンボ作品において新たな犯人像が提示されているとき、社会構造そして大衆の意識と価値観が変化した部分を、我々はそこに見ることができるのである。

* 8 ターニ、49ページ。

* 9 例えば1997年に制作された新シリーズの一つ『殺意の斬れ味』では、犯人は警察の鑑識係である。彼は鑑識のエキスパートとして証拠を隠蔽し、捜査を混乱させるが、この職業が犯人像に付与されたのは、これが今やミステリの分野で脚光を浴びているばかりではなく、社会的にも権威ある専門職として認知されている結果であると言えるだろう。

刑事コロンボの謎

参考文献

- Saul Schwartz, *The Detective Story* (Illinois: NTC, 1989)
H・ヘイクラフト『推理小説の美学』鈴木幸夫訳 研究社
H・ヘイクラフト『娯楽としての殺人』林俊一郎訳 国書刊行会
ステファーン・ターニ『やぶれさる探偵』高山宏訳 東京図書
マーク・ダウィッドジアク『刑事コロンボの秘密』岩井田雅行・あずまゆか訳 角川書店
山路龍天・松島征・原田邦夫『物語の迷宮－ミステリーの詩学』有斐閣
ジョン・ハイアム『自由の女神のもとへ』齊藤真・阿部斉・古矢旬訳 平凡社
阿部斉他編著『世紀転換期のアメリカ』東京大学出版会
ロナルド・タカキ『多文化社会アメリカの歴史』富田虎男監訳 明石書店
望月幸男, 村岡健治監修『移民』ミネルヴァ書房